「無」とは何か―『ワット』の世界

片岡　務*

What is “nothing”? ― Watt in *Watt*

Tsutomu KATAOKA

Abstract―In *Watt*, “nothing” is depicted as what deprives everything of its meaning as well as its existence. The reason Watt experienced “nothing” in Mr. Knott’s house was because Mr. Knott was “nothing” itself. The death of God who had been giving various blessings on people caused “nothing” to emerge, which have brought people to the world deprived of everything rather than the world without blessings. *Waiting for Godot* and *Endgame* are the plays expressing the “nothing” world deprived of everything.

Key words：nothing, Beckett, Watt

１．　はじめに

前稿[1]の「4. 結び」の中で、私は現代の不条理文学の源流を「神の死」に遡り、不条理文学の第一人者のひとりであるサミュエル・ベケット（Samuel Beckett）は「神の死」を「神の無化」と捉えてその「無」を作品や舞台に表わしたのだと書いた。

では、この「無」とは一体いかなるものなのだろうか、ベケット自身はこの「無」をどのようなものと考えていたのだろうか。これが本稿のテーマである。

２．「無」について

サミュエル・ベケットには、『モロイ』（*Molloy*）、『マロウンは死ぬ』（*Malone Dies*）、『名づけえぬもの』（*Unnamable*）という小説三部作に先立つ作品として『ワット』（*Watt*）という小説がある。この小説は、ノット氏の身の回りの世話をするためにノット氏の館にやってきたワットが、その滞在中に奇妙な体験をするというものである。物語の体裁としては、奇妙な体験のせいで精神に異常をきたして精神病院に収容されたワットがサムという人物に語った話をサムが記述したもの、という形を取っている。ベケットはこの中で、主人公ワットに「無」が起こる様を体験させたり、「無」と出会わせたりしている。

*　釧路高専一般教科

２．１　「無」が起こる

以下は、「無」が起こったことをワットが経験したくだりである。

> ゴール親子およびその後の似たような出来事においてワットを困惑させたのは、何が起こったのか彼には分からなかったということではなく、というのも何が起こったのであろうと彼は構わなかったからであるが、むしろ無が起こった、つまり無であるところのものがこの上ない形式的明確さで起こった、ということであった。[2]

この「無であるところのものがこの上ない形式的明確さで起こった」とは、いったいどのようなことなのであろうか。ワットによれば、

> ワットには何が起こったのか分からなかった。正確に言えば、何が起こったのであろうと彼にはどうでもよかった。しかし、しかじかの事が起こったのだと思う必要性、・・・そうだ、私は覚えている、それは起こったのだ、と言えるようになっている必要性は感じていた。[3]

何が起こったのかは言うことができないけれど、何

かが起こったのだ、とは言える、というのである。つまり「無が起こった」とは、「Aが起こった」というのではなく、主語のAがなくなり、単に「起こった」という動詞だけの状態なのである。Aが「無」なのであるから、必然的に「起こった」しか残りはしない。

では、「無が起こる」ことによって、ワットに身に何が起きたのであろうか。「起こった」しか残っていないのであれば、当然、その出来事の意味内容は失われてしまう。

> ゴール親子の一件は、二人の人間がピアノの調律にやってきて、調律をすませて、よくあるようにちょっと言葉を交わして、そして帰っていったというだけの最低限の意味さえも急速に失って、このことがずっと以前に聞いた物語の一部であるように、話し手も聞き手も下手な半ば以上忘れられてしまった他人の人生の一部であるように思われた。[4]

さらにワットに次のようなことが起きる。

> 例えば溲瓶、ノット氏の溲瓶を見るか思い浮かべるかする。しかし、いくらワットが溲瓶、溲瓶と言ってみても無駄であった。まったく無駄ではないにしてもほとんど無駄であった。というのも、それは溲瓶ではないからである。見れば見るほど、考えれば考えるほど、彼には、それが溲瓶ではないことが確かである気がした。それは溲瓶に似ていた、ほとんど溲瓶であった。しかしそれは溲瓶、溲瓶と言って、それで心安らかになれるような溲瓶ではなかった。それが比類なき適切さでもって、溲瓶のあらゆる用途に応え、そのあらゆる機能を果たしたとしても無駄であった。それは溲瓶ではなかった。そして真の溲瓶の本質から、このようにほんの髪の毛一本ほどだけ隔たっているということが、ワットを限りなく苦しめるのであった。というのも、もしこれほど接近していなければ、ワットはこれほど苦しまなかっただろう。・・・溲瓶は、ワット以外の人にとっては溲瓶のままである、ということをワットは確信していた。ワットにとってのみ、それはもはや溲瓶ではなかったのである。そこでワットは安心を求めて自分自身へと赴いた。・・・しかし、自分自身についてももはや何も断言できない、自分のことを石だと断言してもそれが誤りだとは思えないことを発見して彼は困惑した。・・・自分自身について、彼はもはやかつてのように自分のことを人間であるとは呼べなくなっていた。・・・かと言って人間と呼ばないのであれば、他に何と呼ぶべきなのか、彼には想像もつかなかった。[5]

「無」が起こることによって、ワットの経験する出来事や行為はその意味内容を失う。さらに、ワットの見たり考えたりするものは、自分自身をも含めて、その存在が曖昧化し、「これは溲瓶である」とか「私は人間である」とか、断言できなくなるのである。

２．２　「無」と出会う

だが、ノット氏邸にやってきたワットが、このように「無」が起こるのを目の当たりにするには理由がある。容易に想像できることであるが、Mr Knott = Mr Not なのである。つまり、ノット氏とは「無」を擬人化したものなのである。ノット氏についてワットは次のように述べる。

> 彼はときには、左右それぞれに靴下を履いていた。または片足に靴下を履き、もう片足にはストッキングまたは長靴または短靴またはスリッパまたは靴下と長靴または靴下と短靴または靴下とスリッパまたはストッキングと長靴またはストッキングと短靴またはストッキングとスリッパを履くかまたは何も履いていなかった。・・・または片足にストッキングとスリッパを履き、もう片足には何も履いていなかった。またときには裸足だった。[6]

> ノット氏は、ある日は背が高く太っていて顔色は青白く黒髪だったが、翌日には痩せていて背が低く赤ら顔で金髪であった。次の日にはがっしりしていて中背で顔色は黄色で赤毛であり、また次の日には背が低く太っていて顔色は青白く金髪だった。その次の日には中背で赤ら顔で痩せていて赤毛であって、またその次の日には・・・。こうした姿勢や顔つき体型だけでなく、両足も両脚も両手も両腕も口も鼻も目も耳も毎日変化した。[7]

最初の例は、ノット氏の履物について、靴下、ストッキング、長靴、短靴、スリッパの履き方の組み合わせの羅列（作品では引用部分の６倍ほどの分量の組み合わせが書かれている）、二つ目の例は、ノット氏の背

丈、体型、顔色、髪の色（それぞれ三種類）の組み合わせ８１通りが余すところなく（引用では初めの５組だけをあげてある）述べられているのである。これは言い換えれば、「ノット氏の履いているものは、いつも同じではなかった。」「ノット氏の背丈、体型、顔色、髪の色は、定まっていなかった。」ということである。

延々と言葉を尽くして、可能な組み合わせを列挙して、いかにも多様なことを述べているようでいて、実は、たった一言の否定表現で表せることを述べているにすぎないのである。つまり、こうした組み合わせの表現は、「否定」を「肯定」で、言い換えれば「無」を「有」で表すための手段だったのである。

例えば、「無がある」とは言えないのである。なぜなら「無」とは「何もない」ということなのだから、「無がある」とは「何もないもの」が「有る」ということになる。同様に、「Aは無である」とも言えない。「Aは何でもないものである」ということになるからである。これではAの説明にも何にもなっていない。とすれば、互いに矛盾するあらゆる可能性を「Aは、BでありCでありDであり…」と延々と列挙し、そうすることで逆に「Aは、BでもなくCでもなくDでもなく…」すなわち「Aはあらゆるものではない」ということを表現するしかあるまい。（だが、この可能性の組み合わせの列挙表現は、「無」という広大な空間を無意味な言葉で埋め尽くそうとする不毛な行為のようにも思えてくる。）

ワットは言う。

> 無について語る唯一の方法は、それが何かであるかのように語ることである。ちょうど神について語る唯一の方法が、神が人間であるかのように語ることであるのと同様に。[8]

ノット氏は、肯定的表現で表わされた否定的存在である、とでも言うことができるだろうか。ノット氏とは「無」氏なのである。より、直接的に、ノット氏が「無」であることが暗示されている箇所もある。

> ノット氏が住んでいたのは、空ろな沈黙と陰気な薄暗がりが広がる大きな部屋で、そこは彼と彼の召使のために特別にしつらえられた部屋であった。その雰囲気はその部屋から外に出ても彼に付き従い、家の中でも、庭でも、彼が移動するところには共について回るのだった。そして彼が通るところ、すべてを暗くし、すべてを鈍らせ、すべてを沈黙させ、すべてを麻痺させるのであった。[9]

> ワットが見る限り、ノット氏は、第一に、何も必要としていないことを示すこと以外に何も必要としておらず、第二に、自分が何も必要としていないことを示す証人以外にだれも必要としていなかった。[10]

ノット氏が「無」である、と考えれば、このような描写も納得のいくものとなるであろう。その正体が「無」であるノット氏の住む館にやってきたがために、ワットは「無」が起こるのを経験し、「無」を目撃しそれを描写することになってしまったのである。ワットはノット氏邸を去った後精神に異常をきたして精神病院に収容され、普通の人には聞き取れないようなささやきと常人には理解不能の「逆さ言葉」でしか話すことができなくなってしまうのであるが、これもすべてワットが「無」と接した結果と考えることができるだろう。

２．３　「無」とは何か

結局、ワットはノットという「無」に接近したがために、ワットが経験する出来事や行為はその意味内容を失い、またワットが見たり考えたりするものは、その存在が曖昧になっていくのである。視点を変えれば、「無」が出来事や行為の意味やものの存在基盤を吸い込んでいるとも言うことができるだろう。それはブラックホールがあらゆるものを吸い込んでしまうのに似ている。考えてみれば、ブラックホール自体はそこから光も電磁波も何をも放出することはなく、暗黒の宇宙の中で、その存在自体が直接感知されることはない。ただその周辺にあるもの――星であれ何であれ――がそこに吸い込まれていく動きが観測されることによって初めて、その存在が推測されるのである。これは「無」の感知のされ方に似てはいないであろうか。

ベケットの考える「無」についてまとめておきたい。ブラックホール同様、「無」はありとあらゆるもの――意味も属性も意識も所有物も身体機能も――を吸い込んでいく。これが「無」のひとつの側面である。一方、これもブラックホール同様、「無」はそれ自体を直接感知することはできない。つまり、そこには文字通り「何もない」のであるから、そこに「無」が有ると言うことはできないのである。ただその周辺に様々な「有」を散らすことによってしか表現し得ないものなのである。これが「無」のもうひとつの側面である。さらに

「無」によって吸い取られた後には何も残らない。そこには「無」が生じるだけである。そうして「無」はそれ自体を拡大させていくのである。

かつて神は、人間たちに現世での生存の意味を与え、この世で生活し存在することの理由を付与した。それはちょうど巨大な恒星が惑星上の生物に光や熱を与え、惑星上で生存し存在することを可能にすることに似ている。しかし、その恒星が死に絶え、同じ質量を持ったブラックホールと化してしまうと、そのブラックホールは惑星に光や熱を与えなくなるばかりでなく、その周囲の物質（光や熱も含めて）をどんどんその中に吸いこんでいくことになる。そしてその中に吸い込まれたものは再び現れることはない。同様に「神」の死によって生じた「無」、神の存在に取って代わった「無」もまた、人間たちに生存の意味や存在する理由を与えないばかりでなく、人間たちからそれらを奪い取っていき、さらにはものの属性までも剥ぎ取っていくのである。そして失われたものが再び姿を現わすことはない。彼らはこの「無」の攻勢の前に、抵抗する術を持たない。「無」の拡大を横目で見ながら、何をも意味しない膨大な言葉の羅列や脈絡のない事物の列挙によって時間と空間をひたすら埋める作業に従事するだけなのである。

それにしても、「無」「何もないこと」を表現するのに、意味を持ち形もある「言葉」や「文字」を使わざる得ないというのも奇妙なことである。まるで、もっとよく見ようとブラックホールに懸命に光を当てるようなものではないか。ベケットは、「無」を表現せんとした小説三部作以降小説作品はほとんど発表せずに、戯曲作品の執筆とその上演にシフトしていく。もしかするとこれは、「文字」を用いて「無」を表現することの困難さ、その不可能性を認識していたからかもしれない。小説と戯曲では大きな違いがある。小説は、自転車がこぎ続けなければ倒れてしまうように、文字をどんどん連ねていかなければ成立しないものである。これに対し戯曲は台詞と台詞の間に自由に間を取ることができるし、役者が動きを止めることだってできる。目に見える形で「無」を表現することが遥かに容易なのである。

３．「無」の作品

次に、「無」がどのようにベケットの作品の中に現れているのかを示す。分かり易い例としてベケットの代表的なふたつの戯曲作品を見ていこう。

３．１　『ゴドーを待ちながら』

『ゴドーを待ちながら』(*Waiting for Godot*) は、前稿でも書いたように「無」を待つ（求める）芝居である。「ゴドー」（Godot）とは「神」のようでいて「神」ではないもの、すなわち「無化した神」である。ヴラジーミルとエストラゴンは毎日約束の場所でゴドーを待ち続ける。しかし「無」であるゴドーが現れるはずもなく、二人はひたすら時間つぶしのためにどうでもいいような行為にふけるだけである。

「無」が意味を奪い、存在を曖昧にするものであるとすれば、そのようなものを求めたりしても何かを得られようはずもなく、逆に奪われ、曖昧にされるだけである。実際、ヴラジーミルとエストラゴンは待ち合わせの最重要事項である日や場所が正しいのか判らなくなる（「本当にここなんだろうな？・・・本当に今晩なんだろうな？（You're sure it was here? . . . You're sure it was this evening?)。[11]かと言って待ち合わせしている以上、どこか他の場所に行くこともできない。――結局「待つ」こと以外何もできないのである。当然、その待っている間の時間つぶしの行為などなんら意味を持ちえない。（しかも「無」を待っているわけだから、二重にその行為の意味や意義は失われていると言えよう。）

さらに踏み込んで言えば、ヴラジーミルとエストラゴン二人の存在さえその意味を失い、その存在自体も曖昧化していると言えるかもしれない。

二人は舞台上で「何もすることがない（Nothing to be done.)。」という台詞を何度も口にするし、脚本上で「間」の指定が数え切れないくらいある。また第一幕と第二幕のラストシーンで二人は「じゃあ、行くか？」「ああ、行こう。」（”Well, shall we go?” “Yes, let’s go.”）[12]と言いながらそのまま動きを止める。さらにはラッキー（Lucky）の２ページ以上にも及ぶ無意味な言葉の羅列の長台詞（Given the existence a uttered force in the public works of Puncher and Watmann of a personal God quaquaquaqua with white beard quaquaquaqua outside time without extension who from …)。[13] このように台詞や演技によっても、「無」のイメージを舞台上に現出させている。

「神の死」によって「神」がこの世界からいなくなっただけではない。神のいた場所に「無」が生じたのである。まるでブラックホールのように。そしてこの生じた「無」のために、「神」が与えてくれていた世界の秩序や人生の意味が単に与えられなくなったばかりでなく、さらに次々に秩序は破壊され、様々な意味や

意義が奪い取られていくのである。人の行為の意味、さらには人の存在意義までも。これが「神」なき後の世界なのである。

３．２　『勝負の終わり』

『勝負の終わり』（*Endgame*）は「無」に接近していく芝居である、ハム（Hamm）とクロヴ（Clov）のいる頭蓋骨の内部を思わせる部屋の外は、動くものの何一つない灰色の世界であり、窓から見える風景は「ゼロ」である。つまりは「無」の世界である。そしてその「無」は二人のいる部屋の中にも忍び寄る。実際に「もの」が消滅していくのである。おかゆも砂糖菓子ももうない。鎮痛剤もない。ナッグとネル（Nagg Nell）もドラム缶から姿を現さなくなる。ハムとクロヴの二人は「どうしてこんな道化芝居をするのだろう、来る日も来る日も。（Why this farce, day after day?）」「日課さ。（Routine.）」[14]という会話を交わす。ここでも彼らのやっていることは、終わりを迎えるまでの時間潰しにすぎない、彼らが舞台で繰り広げる会話も振る舞いも、さらには彼らの存在さえもすべて意味を持たず、その意味を奪い取られているのである。もちろん数え切れない「間」の指定も同様であるし、ラストシーンでは、息絶えようとしているハムの最後の長台詞の間、旅装を調えたクロヴが立ち尽くすのである。

４．「無」によって生じるもの

神の死、神の無化によって生じた「無」とはいかなるものなのかについて、ここまで検証してきた。あたかもブラックホールのように、そこから出てくるものは皆無であるばかりでなく、その周りのものを次々と飲み込んでゆくもの。具体的なものは言うまでもなく、あらゆる属性、意味、存在意義さえもすべて吸収し、「無」の世界を拡大していくもの。これが「無」である。

では、この「無」によって生じるもの、「無」によって明らかにされるものはないのだろうか。それはワットのように狂気に陥るだけなのだろうか。

そうではない。「無」によって、そのものがまとっていたすべてのもの――具体的な所有物や属性、そのものの意味や存在意義さえも――が剥ぎ取られることで、そのものの裸の本質が明らかにされるのである。待つことを拒否されながらも待つことしか残されていない人間、死を目前にして回想に耽るしかない人物像を暴き出すのである。

オルガ・ベルナル（Olga Bernal）は次のように述べている。

> ベケットの登場人物たちは、語り手が彼等からあらゆる支点を、何かを手に入れるすべての可能性を取り去る。・・・その時、彼等は、借りものも仮面もはぎとるこの欠乏の中で、存在論的純粋を求める姿であらわれてくる。[15]

また、内田耕治はその著作の中で次のように述べる。（もっともこの部分は主に小説三部作についての記述であるが。）

> 彼（モロイ）が自己の周辺の些事に拘泥し、それについての仮説ばかりに耽るのは、・・・「自分のこと」という「本質的なこと」との孤独な対峙を避けるためであり、要するに、彼は、「自分のこと」に触れないためにこそ、喋り続け、書き続けていることになる。・・・しかし、果たして彼に、隠蔽すべき「自分」とか「本質」とかがあるだろうか。仮にあるにしても、それはせいぜい、隠蔽したくともそんなものは何もないという現実ぐらいなものではないのか。つまり、・・・モロイが「自分のこと」を何も語りえないのは、もちろん、「自己」というものの「本質」が語りえないものだからである。何故語りえないのかと云えば、語るべきものが何もないからである。・・・自己の本質を、デカルトがコギトとして発見できたのと全く同じ場所に、ベケットは何も発見できなかったのであり、あるいは、何も発見できないということの裏側に、「無」というものを発見したのである。自己とは虚無のかけらにすぎず、瑣末な周辺からなり、それによってのみ支えられているものなのである。・・・おそらくベケットにとっても、「無」を描く唯一の方法は、まず「それを何かであるかのように語ること」なのであり、「無から何かを引き出すこと」なのであり、次に、その・・・「何か」から今度は逆に、その「何か」の持つ属性を一つずつ剥がし続け、消却し続けることによって、「無」へと、非・存在へと無限に近づけていくことなのである。[16]

ベルナルは、ベケットの登場人物たちは余計なものを取り去られた後に純粋論的存在、すなわちその本質がむき出しになった存在となる、と論ずるのであるが、内田はさらに踏み込んで、その本質さえも「無」あるいは限りなく「無」に近いものに過ぎない、と言うの

である。

確かに、ヴラジーミルとエストラゴンの純粋論的存在意義、余計なものを取り去ったその本質的意味は「待つ」ことである。しかし、その待ち人が「無」であり現れない以上、その存在意義も本質的意味も「無」に過ぎないと言わざるを得ない。ハムとクロヴについても同様に「死」という「無」に片足を突っ込んでいる以上、やはり「無」であろう。

結局、「無」によって生じるものもまた「無」である、ということになるのであろうか。

５．結び

本論では、『ワット』という小説から、ベケットが「無」というものをどのようなものとして捕らえていたのかをまず考察した。ベケットは「無」を、まるでブラックホールが光や電磁波も含めてあらゆる物質を飲み込んでいくように、ありとあらゆるもの――意味も属性も意識も所有物も身体機能も――を吸い込んでゆくものとして描いていた。

そしてその「無」は、他の作品でも描かれる。例えば『ゴドーを待ちながら』は、「無」を待つ（求める）芝居であるし、『勝負の終わり』は「無」に接近していく芝居であると言える。しかし、そのように「無」を待ったり、「無」に近づいたりした結果その登場人物たちのみに何が起こったのだろうか。つまりその「無」から何が生じたのだろうか。「無」は彼らからあらゆるものを剥ぎ取っていった。そして彼らはその属性や所有物を奪われ裸にされ、その本質がむき出しにされる。だが、その不純物を取り去った純粋な本質もまた「無」なのであった。

「無」からは「無」しか生じない。自明の理である。しかしそれでもベケットは「無」について書き続け、「無」を題材とした作品を発表し続けるのである。

ベケットはジョルジュ・デュテュイ（Georges Duthuit）との対話の中で、「何がお好みなのか？」という質問に対して、次のように答えている。

> 表現するものが何もない、表現する手段が何もない、表現する題材が何もない、表現する力がない、表現しようとする欲求がない表現、ただ表現しなければならないという義務感しかない表現、これが私の好みだ。[17]

またベケットはデモクリトス（Democritus）の言葉とされる Nothing is more real than nothing. という表現がお気に入りだったそうである。[18]

注

1　釧路工業高等専門学校紀要第 42 号,2008、pp.83-88
2　Samuel Beckett, *Watt*, Grove Press, New York., 1959, p.76
3　Ibid., p.74
4　Ibid., p.74
5　Ibid., pp.81-83
6　Ibid., pp.200-201
7　Ibid., pp.209-211
8　Ibid., p.77
9　Ibid., p.200
１０　Ibid., p.202
１１　Samuel Beckett, *Waiting for Godot*, Faber and Faber, London. Boston, 1956, pp.14-15
１２　Ibid., p.54,p.94
１３　Ibid., pp.42-45
１４　Samuel Beckett, *Endgame*, Grove Press, New York., 1958, p.32
１５　オルガ・ベルナル『ベケットの小説』安藤信也訳、紀伊國屋書店、1972、pp.44-45
１６　内田耕治『無の表現　表現の無』、駿河台出版社、1990, pp.153-157
１７　Martin Esslin,ed., *Samuel Beckett: A collection of Critical Essays*, Prentice Hall, Inc., New Jersey, 1965, p.17
１８　高橋康也『エクスタシーの系譜』、京都アポロン社、1981, p.291

参考文献

＊「注」にあげた文献以外のもので主なものを示す。

［１］C.J.Ackerley and S.E. Gontarski, *The Grove Companion to Samuel Beckett*, Grove Press, New York, 2004
［２］Samuel Beckett, *Molloy Malone Dies The Unnamable*, Grove Press, New York, 1965
［３］Ruby Cohn, *Samuel BECKETT*, Rutgers Unv. Press, New Jersey, 1962
［４］Enoch Brater, *why beckett*, Thames and Hudson Ltd, London, 1989
［５］高橋康也『サミュエル・ベケット』研究社、1971
［６］　同　『ノンセンス大全』晶文社、1977
［７］　同　『ベケット大全』白水社、1999
［８］ハッサン『沈黙の文学』井上・近藤訳、研究社、1973